

エスカレーター片側空け 困難な人も

朝日新聞 2月14日朝刊「生活」欄の標題の記事に注目した。こうした日常生活に関わる記事から考えさせられることも多いので、抜粋して紹介しておきたい。リードから「東京なら右側、大阪なら左側」。エスカレーターで、「歩く人」のために片側を空けておく光景が当たり前になっています。でも、空いている側に「立つ必要がある人」もいることは、あまり知られていません。歩行中の事故も後を絶たず、片側歩行という常識を見直そうとする動きも出ています。

埼玉県の40代女性は毎朝の通勤の際、駅のエスカレーターの前に立つと、いったん立ち止まる。タイミングを見計らい、まず右手で手すりをつかんでから、右足をエスカレーターに乗せる。そのまま、首都圏では「歩く人のために空けておくのが当然」と思われることも多い右側に、立ったまま乗っていく。

女性は10年ほど前、脊髄にできた腫瘍の摘出をした後、胸から下にマヒが残った。リハビリを続けているが、今も両手に歩行補助の杖がないと歩くのが難しい。主に左手の杖に体重をかけるため、エスカレーターの乗り降りの際、杖から手を離して使えるのは右手だけ。だから、どうしても右側に立つ必要がある。

職場に復帰する時に、大きな障害になったのが、エスカレーターの存在だった。電車で通勤するには、エスカレーターの利用は避けられない。自分自身、手術前は「乗る時は左側に立ち、右側は空けておく」のが当たり前だと思っていた。急いでいる時は自分が右側を歩くこともあったし、「右側に立つな」と注意されている人を見かけたこともあった。「右側に立たざるを得ない人がいるなんて、想像もしていなかった」

その「常識」に縛られて、術後しばらくは無理をして左側に立っていたが、バランスを崩しそうになったことも。「本当に怖かった」。リハビリの先生に「自分の安全を最優先に」と言われ、2017年6月から、意を決して右側に立つようになった。

女性のようにエスカレーターに立って乗る必要がある人に寄り添おうと、東京都理学療法士協会は昨年、写真のような「わけあってこちら側で止まっています」と書かれたキーホルダーを作製した。また、JR目黒駅の商業施設「アトレ目黒」で昨年末、エスカレーターに足形の絵などのステッカーが実験的に貼られた。



(2019年2月19日)